



あさみ ひろし ● 2000年、産業医科大学医学部卒業。2006年、産業医科大学大学院障害機構系災害医学部門修了(医学博士号取得)。2006年より大手通信企業の専属産業医勤務を経て、2009年より九州旅客鉄道株式会社の専属産業医となる。2015年より現職。

この素晴らしい企業とともに頑張ることで 世界の多くの人を元気にしたい

九州旅客鉄道株式会社（以下、JR九州）では、「一人ひとりの健康に対する意識と行動が会社の元気のもとになる」という考えのもと、社員自身が健康づくりに取り組むとともに、会社や職場が支援を行う活動を推進している。2009年に産業医として同社に着任し、2015年からは健康管理室長としてその活動の中心的役割を果たしている浅海洋さんに、JR九州が取り組む健康経営の進化と、産業医の役割について話を伺った。

限られたリソースで衛生活動を推進

いまでこそ、社員と家族の健康を全社的に後押ししているJR九州ですが、私が着任した当時は、まだ産業医の役割が十分に理解されていませんでした。そのためリソースも少なく、産業保健についてもあまり前向きではありませんでした。

この状況に変化が現れたのは、2009年の新型インフルエンザの時です。その対策本部設立時に、経営陣の前で新型インフルエンザについて説明する機会をいただき、開始15分前という急なタイミングでしたが、「必要になることがある」と見越して以前から用意していた資料で説明したところ、経営陣に納得と安心が広がりました。そこで経営陣に産業医の意義を認められたように思います。翌月から当時の総務部長とのミーティングがはじまり、社員を健康にするための作戦会議が始まりました。

こうした機会に、保健衛生の重要性や産業医の役割について理解を促していったところ、2011年には経営方針として全社的に産業保健活動の目標・指針を掲げるまでになりました。

ただ、会社が経営方針を打ち出しても、現場の社員には、すぐには具体的な取組や健康意識の高まりは見られませんでした。

そこで、2012年度から「衛生担当者会議」という、社員

50人以上の事業所の箇所長、安全管理者、衛生管理者を集めた勉強会を開始しました。ここで企業としての方針の説明や各種施策の説明、および協力要請等を繰り返し行いました。数年のうちには人間ドック受診率が50%を超え、特定保健指導完遂率が70%超となりました。JR各社でもトップクラスとなり、表彰を受けるまでになりました。

2014年からは、衛生担当者会議で取り組んできた成果を報告し、産業医の持つ各データに基づいて課題を具体的に提示するようにしました。例えば「生活習慣病高リスク社員が徐々に減少している」という成果とともに、喫煙率についても他社との比較をし、課題を提示しました。また、各職場のよい取組事例の紹介や、衛生担当者に対して、その年の重点課題についてミニ講演も行いました。

これらの活動の結果、社内アンケートで「衛生活動への認識が深まった」、「好事例をもっと知りたい」といった声が出てきました。保健衛生への意識が全社的に高まっていくことを感じることができました。

産業医の役割は経営陣と社員をつなぐこと

健康づくりの主体は、あくまでも社員です。私たちは、経営者と社員と関係者をつなぐ接着剤です。社員の主体性を尊重し、教えすぎないこと、成長の機会や挑戦の機会を奪わないことをモットーに活動しています。

いま、九州は度重なる自然災害等で生活も産業も大変厳しい状況にあります。JR九州は地域に元気をつくるために頑張っています。JR九州が元気の源になり、企業として社員の「健康に力を入れている」という点が気づかれれば、「社員の健康に真剣に取り組むと企業も元気になる」というメッセージになると思います。やがて、九州だけでなく日本全体を、ひいては世界を元気にしていく……。そんな流れをJR九州とつづけていければと思っています。